

■ニコライ・ネフスキー ロシアの民俗学者。来日直後にロシア革命が起こり、日本で言語研究、名をなし帰国するも悲劇の最期。

にこらいねふすきい  
大本教・・・1892＝

ロシアでシベリア鉄道が着工し、神田駿河台にニコライ堂が竣工した翌年、モスクワの北250kmに位置する州都ヤロスラヴリで、県内の地方裁判所予審判事の子に生まれる。ミドルネームは、アレクサンドロヴィチで、生まれて1年にもならないうちに母と、

日清戦争始・1894＝2歳：  
白馬会・・・1896＝4歳：  
ピアノ産化・1900＝8歳：  
田中正造直訴1901＝9歳：  
日露戦争始・1904＝12歳：  
日露戦争終・1905＝13歳：

この年、日本がロシアに対し宣戦布告、ロシア在留の日本人が送還の途中心ルイビンスクを通過している。この年、戦艦ポチョムキンの大反乱(第一次ロシア革命)。この間、ルイビンスク在住のタタール人からタタール語を習い、友人の影響で、独学でアラビア文字を覚えるなど、言語学的な才能を発揮し始め、この年、コスロフ探検隊が、西夏の高都バラ・ホトから多数の西夏語文献を発掘。伊藤博文暗殺1909＝17歳：銀メダルで卒業。叔母の意向で、合格したうちのサントペテルブルク工芸専門学校に進学するも、韓国併合・・・1910＝18歳：退学し、前年に合格していたもう一校のサントペテルブルク大学東洋語学部に入校し直し、中国語・日本語を専攻、民族学、言語学、中央アジア史などを学び、

明治天皇没・1912＝20歳：  
大正政変・・・1913＝21歳：  
第一次大戦始1914＝22歳：  
21ヶ条要求・1915＝23歳：

日本に二ヶ月間旅行に出掛け、東京に滞在して日本文学を研究。大学卒業後、教授候補者として勉学を重ねるうち、大学派遣の官費留学生として、2年間の予定で日本に留学。東京大学に通っていたニコライ・コンラドとともに本郷駒込林町に一戸を構え、ともに漢学者高橋天民から漢文を習い、中山太郎を通じて柳田国男、折口信夫らと、その後も、金田一京助・山中共古・佐々木喜善らと知り合い、新村出・羽田亨らとも親交、この年、東京帝大卒のロシアの日本・東洋学者セルゲイ・エリセエフが再度来日。誕生日に柳田の訪問を受け、柳田、折口らの講義をきく。中山とともに茨城県の安寺・持方部落に旅行などして、

ロシア革命・1917＝25歳：  
本格政党内閣1918＝26歳：

\*留学終了予定の年、ロシア革命が起こり、親友ニコライ・コンラドは帰国、本国からの送金が停止されて上に、呼吸器の病に倒れ、手術を受けることになって、帰国を延期し、回復後、遠野へ旅行。日本がシベリアに出兵した年、雑誌[太陽]に仮名で「冠辞異考」を発表した年、雑誌[土俗と伝統]第一号に掲載された記事「農業に関する血液の土俗」が日本語による最初の発表物と見なされ、第二号に「遠野のまじなひ人形」、第三号に「相模の獅子舞ひの歌」と続けて発表。

ハルビン条約・1919＝27歳：  
大暴落・・・1920＝28歳：

住み込みで家事をし恋仲になった前山光子と間に、娘女子が誕生。結婚を申し込むも光子の母が反対で挙式のみを行う。北海道の小樽高等商業学校(現在の小樽商科大学)のロシア語教師となり、オシラ様信仰を研究し、金田一京助にアイヌ語を習う。宮古島出身の上運天(稲村)賢敷と知り合い、宮古島方言を研究。シベリアに出兵した日本兵の駐留する町で赤軍による住民大虐殺のニコラエフスク(尼港)事件が起こり、滞日していたエリセエフが国外へ亡命した年、息子が誕生するも死去、光子とも別れる。東北地方を縦断旅行し、磐城の高木誠一、遠野の佐々木喜善を訪問し、オシラ様に関する佐々木との共同研究はじまる。

原敬首相暗殺1921＝29歳：  
水平社結成・1922＝30歳：

盲目の詩人ワシーリ・エロシエンコ、日本から追放され、エリセエフが、大阪朝日新聞に「赤露の人質日記」を発表した年、アイヌ語は2人のアイヌ老女(コボアヌとタネサンノ)から習い、メノコユウカラ(女が語る叙事詩)やウエケレ(昔話)、ウバシクマ(言い伝え)を記録、前年、小樽高商のドイツ人教師を介し、原稿整理や資料収集のアシスタントとして、北海道後志国積丹郡入舂村の網元の長女萬谷イソ(磯子、芸名は旭輦)と知り合い、結婚。大阪外国語学校(現在の大阪大学外国語学部)のロシア語教師となり、大阪に転居してからも、ユウカラの高名な伝承者である錦沢ワカルバの娘錦沢ユキを半年ほど雇ってアイヌ語の研究を続け、膨大な数のロシア語訳を残す。その論文集は、50年後、ソ連で「アイヌのフォークロア(民俗)」として出版される。初めて宮古群島へ出かけ、同行した東京高等師範学校に通う上運天賢敷(後に稲村賢敷と改姓、郷土史家となる)から、宮古島方言を学び、

関東大震災・1923＝31歳：  
護憲三派圧勝1924＝32歳：  
治安維持法・1925＝33歳：

イソ夫人の妹、萬谷ミサ、お手伝いとして大阪に行く。京都大学史学研究会で「宮古島の結婚と祭礼」について講演。京都帝国大学文学部でもロシア語を教え、弟子に、石田英一郎、高橋盛孝、田村実造がいた。レーニンが死去した年、イソ夫人の母、萬谷リサ、大阪のネフスキー一家に向かう途中死去。石浜純太郎との交友から、西夏語や西夏文字への研究関心が向けられ、日ソ基本条約調印され国交が回復すると、西夏語資料入手のため中国調査旅行中、北京のソ連大使館に勤務中の旧師を訪れ、中国学者アレクセイ・イワノフとの出会いを機に、カラ・ホトの西夏語のテキストの研究と西夏文字の解説に着手、

円本時代始・1926＝34歳：  
金融恐慌・・・1927＝35歳：

京都学連事件で、初の治安維持法が適用されるのに遭遇。論文「西夏文字抄覧」を発表。宮古島へ二度目の調査旅行をし、{民族}に、論文「アヤゴの研究」を発表。{芸文}に「王静安先生を訪ねて」を発表。王静安は、一般には王国維と称され、羅振玉、董作賓、郭沫若とともに、「甲骨四堂」と称される西夏学者。{民族}に、「美人の生れぬわけ」「宮古島子供遊戯資料」を発表。マレー語教授浅井恵倫とともに台湾へ言語調査に行き、台北で別れて後は、一人で曹族の言語を調査。大阪外国語学校で結成した大阪東洋学会を、石浜純太郎、高橋盛孝、浅井恵倫、笹谷良造らとともに発展させて、結成直前に亡くなった王静安にちなみ、{静安学社}と改名して、幹事の一人に就任。レニングラードのソ連科学アカデミーにて西夏語資料の送付方を依頼し、帰国の決意をかため、西夏語文書の文法を再構、西夏語・英語・ロシア語による西夏語辞典を編纂。没後、1960年に、西夏語の辞書の草稿として「タングーツカヤ・フィロロギヤ(西夏語文献学)」の題で出版、新世代の学者に西夏語テキスト研究の門戸を開き、その2年後、レーニン賞が与えられる。

共産党事件・1928＝36歳：  
世界恐慌・・・1929＝37歳：

ひとり娘のエレナ(愛称ネリ)が誕生し、お手伝いとして、イソ夫人の妹ヤエ(後に三上姓)が大阪に行く。宮古群島へ三度目の旅行をし、民俗、民謡(アグ、アヤゴ)などを調査、雑誌{民族}などに発表。方言辞典編纂のためにカードやノートをまとめたりした。この間、東恩納寛悳や伊波普猷とも親しく手紙をやり取りしていた。{民族}に、「故シュテルンベルグ氏〜其小伝と著作」、論文「月と不死」を発表。{静安学社}で、石浜との共同研究「子テン(門カマエに眞)文智矩陀羅尼經の断片」報告。

海軍軍縮条約1930＝38歳：  
満州事変・・・1931＝39歳：  
五一五事件・1932＝40歳：  
国際連盟脱退1933＝41歳：  
帝人疑獄事件1934＝42歳：  
芥川直木賞始1935＝43歳：

イソ母子は上京して、下谷で玉突場経営。レニングラードで梅原末治と会う。{(内藤博士還暦記念史学論叢)に「西夏助詞考略」、{龍谷大学論叢}に、石浜との共同研究「西夏語訳大蔵経考」}に「ロシア語論文「タングート学史概説」を発表し、エルミタージュ博物館で、西夏の天体崇拜について講演。ロシア語論文「天の蛇としての虹の観念」を発表。イソ母子のソ連渡航が実現し、レニングラードに到着。論文「西夏国名考」発表。石浜・石田幹之助との編著「東洋学叢編」刊行。ユルパクチと共著で「日本語教科書(初級コース)」刊行。ロシア語論文「ムスクヴィヤからSSSRへ」「古代日本の儀礼的詩歌(祝詞)」「アイヌの民間伝承」や「曹族言語資料」発表し、ソ連科学アカデミー定例会議で「タングート文字とそのフォント」を報告して、通信会員に推薦されるなどしたが、

日中戦争始・1937＝45歳：  
Wikipedia「ニコライ・ネフスキー」、加藤九祚「天の蛇 ニコライ・ネフスキーの生涯」、

日本国のためにスパイ活動を行ったとして、内務人民委員部(NKVD)によって突然逮捕され、すぐに、国家叛逆罪によって、妻とともに、大粛清(銃殺刑)され、没した。娘エレナは両親の処刑後、ニコライ・コンラドや3家族に引き取られ、のちに医師になった。1957年ベラルーシ軍事法廷でネフスキー、翌年には、レニングラード軍管区法廷で妻イソの名誉回復がなされた。その後、日本で、「月と不死」「アイヌ・フォークロア」「宮古のフォークロア」が出版され、1976年には、第3回大佛次郎賞を受賞した加藤九祚「天の蛇 ニコライ・ネフスキーの生涯」が刊行され、その時の没年は1945年となっているが、長年かけた関係者への調査で1937年であることが判明したため、新版では「死の真相」の解明と、長年の交流がある遺族や関係者たちのその後を追記した約40頁を増補している。

満州事変・・・1931＝39歳：  
五一五事件・1932＝40歳：  
国際連盟脱退1933＝41歳：  
帝人疑獄事件1934＝42歳：  
芥川直木賞始1935＝43歳：

イソ母子は上京して、下谷で玉突場経営。レニングラードで梅原末治と会う。{(内藤博士還暦記念史学論叢)に「西夏助詞考略」、{龍谷大学論叢}に、石浜との共同研究「西夏語訳大蔵経考」}に「ロシア語論文「タングート学史概説」を発表し、エルミタージュ博物館で、西夏の天体崇拜について講演。ロシア語論文「天の蛇としての虹の観念」を発表。イソ母子のソ連渡航が実現し、レニングラードに到着。論文「西夏国名考」発表。石浜・石田幹之助との編著「東洋学叢編」刊行。ユルパクチと共著で「日本語教科書(初級コース)」刊行。ロシア語論文「ムスクヴィヤからSSSRへ」「古代日本の儀礼的詩歌(祝詞)」「アイヌの民間伝承」や「曹族言語資料」発表し、ソ連科学アカデミー定例会議で「タングート文字とそのフォント」を報告して、通信会員に推薦されるなどしたが、

日中戦争始・1937＝45歳：  
Wikipedia「ニコライ・ネフスキー」、加藤九祚「天の蛇 ニコライ・ネフスキーの生涯」、

日本国のためにスパイ活動を行ったとして、内務人民委員部(NKVD)によって突然逮捕され、すぐに、国家叛逆罪によって、妻とともに、大粛清(銃殺刑)され、没した。娘エレナは両親の処刑後、ニコライ・コンラドや3家族に引き取られ、のちに医師になった。1957年ベラルーシ軍事法廷でネフスキー、翌年には、レニングラード軍管区法廷で妻イソの名誉回復がなされた。その後、日本で、「月と不死」「アイヌ・フォークロア」「宮古のフォークロア」が出版され、1976年には、第3回大佛次郎賞を受賞した加藤九祚「天の蛇 ニコライ・ネフスキーの生涯」が刊行され、その時の没年は1945年となっているが、長年かけた関係者への調査で1937年であることが判明したため、新版では「死の真相」の解明と、長年の交流がある遺族や関係者たちのその後を追記した約40頁を増補している。

満州事変・・・1931＝39歳：  
五一五事件・1932＝40歳：  
国際連盟脱退1933＝41歳：  
帝人疑獄事件1934＝42歳：  
芥川直木賞始1935＝43歳：

イソ母子は上京して、下谷で玉突場経営。レニングラードで梅原末治と会う。{(内藤博士還暦記念史学論叢)に「西夏助詞考略」、{龍谷大学論叢}に、石浜との共同研究「西夏語訳大蔵経考」}に「ロシア語論文「タングート学史概説」を発表し、エルミタージュ博物館で、西夏の天体崇拜について講演。ロシア語論文「天の蛇としての虹の観念」を発表。イソ母子のソ連渡航が実現し、レニングラードに到着。論文「西夏国名考」発表。石浜・石田幹之助との編著「東洋学叢編」刊行。ユルパクチと共著で「日本語教科書(初級コース)」刊行。ロシア語論文「ムスクヴィヤからSSSRへ」「古代日本の儀礼的詩歌(祝詞)」「アイヌの民間伝承」や「曹族言語資料」発表し、ソ連科学アカデミー定例会議で「タングート文字とそのフォント」を報告して、通信会員に推薦されるなどしたが、

日中戦争始・1937＝45歳：  
Wikipedia「ニコライ・ネフスキー」、加藤九祚「天の蛇 ニコライ・ネフスキーの生涯」、

日本国のためにスパイ活動を行ったとして、内務人民委員部(NKVD)によって突然逮捕され、すぐに、国家叛逆罪によって、妻とともに、大粛清(銃殺刑)され、没した。娘エレナは両親の処刑後、ニコライ・コンラドや3家族に引き取られ、のちに医師になった。1957年ベラルーシ軍事法廷でネフスキー、翌年には、レニングラード軍管区法廷で妻イソの名誉回復がなされた。その後、日本で、「月と不死」「アイヌ・フォークロア」「宮古のフォークロア」が出版され、1976年には、第3回大佛次郎賞を受賞した加藤九祚「天の蛇 ニコライ・ネフスキーの生涯」が刊行され、その時の没年は1945年となっているが、長年かけた関係者への調査で1937年であることが判明したため、新版では「死の真相」の解明と、長年の交流がある遺族や関係者たちのその後を追記した約40頁を増補している。

満州事変・・・1931＝39歳：  
五一五事件・1932＝40歳：  
国際連盟脱退1933＝41歳：  
帝人疑獄事件1934＝42歳：  
芥川直木賞始1935＝43歳：

イソ母子は上京して、下谷で玉突場経営。レニングラードで梅原末治と会う。{(内藤博士還暦記念史学論叢)に「西夏助詞考略」、{龍谷大学論叢}に、石浜との共同研究「西夏語訳大蔵経考」}に「ロシア語論文「タングート学史概説」を発表し、エルミタージュ博物館で、西夏の天体崇拜について講演。ロシア語論文「天の蛇としての虹の観念」を発表。イソ母子のソ連渡航が実現し、レニングラードに到着。論文「西夏国名考」発表。石浜・石田幹之助との編著「東洋学叢編」刊行。ユルパクチと共著で「日本語教科書(初級コース)」刊行。ロシア語論文「ムスクヴィヤからSSSRへ」「古代日本の儀礼的詩歌(祝詞)」「アイヌの民間伝承」や「曹族言語資料」発表し、ソ連科学アカデミー定例会議で「タングート文字とそのフォント」を報告して、通信会員に推薦されるなどしたが、

日中戦争始・1937＝45歳：  
Wikipedia「ニコライ・ネフスキー」、加藤九祚「天の蛇 ニコライ・ネフスキーの生涯」、

日本国のためにスパイ活動を行ったとして、内務人民委員部(NKVD)によって突然逮捕され、すぐに、国家叛逆罪によって、妻とともに、大粛清(銃殺刑)され、没した。娘エレナは両親の処刑後、ニコライ・コンラドや3家族に引き取られ、のちに医師になった。1957年ベラルーシ軍事法廷でネフスキー、翌年には、レニングラード軍管区法廷で妻イソの名誉回復がなされた。その後、日本で、「月と不死」「アイヌ・フォークロア」「宮古のフォークロア」が出版され、1976年には、第3回大佛次郎賞を受賞した加藤九祚「天の蛇 ニコライ・ネフスキーの生涯」が刊行され、その時の没年は1945年となっているが、長年かけた関係者への調査で1937年であることが判明したため、新版では「死の真相」の解明と、長年の交流がある遺族や関係者たちのその後を追記した約40頁を増補している。